

若者世代における人生儀礼の現状と課題：
産育儀礼に着目して

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 静岡大学学術院教育学領域 公開日: 2023-12-22 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 村上, 陽子, 信國, 瑞希, 鳥居, 優理香, 高橋, 沙南 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.14945/0002000155

若者世代における人生儀礼の現状と課題

—産育儀礼に着目して—

Current status and issues of life rituals among Japanese university students:
Focusing on childbirth rituals

村上 陽子¹, 信國 瑞希¹, 鳥居 優理香², 高橋 沙南³

Yoko MURAKAMI, Mizuki NOBUKUNI, Yurika TORII and Shanan TAKAHASHI

(令和5年11月30日受理)

ABSTRACT

Life rituals are celebrations of each life milestone, such as the growth of a child, coming of age, and longevity. This study investigated the current status and issues among university students regarding childbirth rituals. This paper examined the *Obi-Iwai*, *Hatsumiya-Mairi*, and *Shichi-Go-San* among the childbirth rituals. *Obi-Iwai* (Obi-tying celebration) is a ceremony in which a maternity belly band is wrapped around the belly of a pregnant woman in her fifth month of pregnancy to pray for an easy delivery. *Hatsumiya-mairi* (first visit to the shrine) is a ceremony to report to the birth deity with gratitude that the baby has safely reached the first month of life. *Shichi-Go-San* is a festival for children aged 3, 5, and 7 (more precisely, boys aged 3 and 5 and girls aged 3 and 7). The following results were obtained. The recognition of *Obi-Iwai* among university students was significantly low. Many university students mistakenly believed that the *Obi-Iwai* was not for the pregnant mother, but for the child after birth. The recognition of *Hatsumiya-Mairi* among the students was low, at approximately 20%. The students did not fully understand the date of *Hatsumiya-Mairi* and the festive clothes to be worn when paying homage. Although the university students had experience with *Shichi-Go-San*, they did not understand the details of the age or the day to visit the shrine. The results of this study suggest that it is necessary to provide opportunities for learning life rituals at home and at school.

1. はじめに

我が国には、様々な人生儀礼や年中行事がある。これら儀礼や行事は、我が国の「和」の文化の形成や伝承の一翼を担ってきた¹⁾。人生儀礼とは、子どもの成長・成人・長寿など人生の節目の祝いであり、初宮参りや七五三、成人式などがある^{1) 2)}。年中行事とは、年間の折り目ごとに行われる儀礼³⁾であり、初詣や節分、七夕などがある。古来、我が国では、人生儀礼や年中行事は家庭や地域で伝承されてきた。家庭では、親から子、子から孫へと家庭内で伝承さ

¹ 家政教育系列

² 沼津市立第五中学校

³ 静岡県立裾野高等学校

れ、地域では各地域の儀礼・行事などの伝統文化を形成・継承する機能を果たすとともに、地域の連帯感を熟成する役割を担ってきた⁴⁾。しかし、近年、少子高齢化や核家族化など生活様式や社会構造の変化により、人生儀礼や年中行事が簡略化されたり消滅したりするなど、その継承が危惧されている^{4) 5)}。

こうした状況を受けて、小・中・高等学校学習指導要領では、伝統と文化の継承・発展・創造に関する教育の充実が求められている^{6) 7) 8)}。人生儀礼・年中行事と家庭科との関わりをみると、「衣」「食」「住」「家族」など人の生活や人生に関わるものであり、家庭科の学習内容と深い関連があり、学習すべき内容といえる。しかし、家庭科をはじめとする学校教育においては、人生儀礼や年中行事は十分に学習されていないのが現状である。加えて、若い世代においては人生儀礼や年中行事に対する認知度や実施経験が低いことが報告されている^{9) 10)}。また、世代により、産育儀礼の捉え方や実施状況が異なることが報告されている^{11) 12)}。妊娠・出産・育児に関する慣習の実態などについては、民俗学・文化人類学などにおいて多くの研究があるが、人生儀礼や年中行事について、伝統文化の理解と継承を目指す教育的視点からの研究はほとんどないのが現状である。

本研究では、若者世代を対象として、人生儀礼と年中行事に関する意識と実態を検討している。人生儀礼について認知度や経験率を調査した結果、人生儀礼の種類によって差異があること、理解の程度も相違があることが明らかとなった¹³⁾。そこで、本稿では人生儀礼のうち、産育儀礼に対する認知度・理解度に焦点を当てて、現状と課題を把握することとした。得られた知見をもとに、伝統文化の理解・継承・創造に繋げていく。

2. 産育儀礼と本研究の調査対象（帯祝い、初宮参り、七五三）

（1）産育儀礼

人生儀礼には、子どもの初誕生の祝いから、社会的に一人前と認められる成人の間に、段階的な儀礼がある¹⁴⁾。本稿では、人生儀礼のうち、産育儀礼に焦点を当てる。

産育儀礼とは、安産祈願・帯祝い（腹帯祝い）・命名式・初宮参り・初誕生、七五三などをいう¹⁵⁾。坂元¹⁶⁾は、産育儀礼とは「子どもの誕生から子育ての終わりまでの期間を中心として、子どもの生存と成長を祈念し祝福することを目的に実施される一群の通過儀礼」であり、「誕生から死に至るまでのいわゆる人生儀礼の一部を構成」するものであり、「当該社会における子どもやその発達に関する人々のローカルな信念や知識」を伴うものと言及している。

飯島¹⁷⁾は、江戸時代（文化 8 年（1811））に刊行された『進物便覧』（隴西大隠）をもとに、産育儀礼に関するものとして、①妊帯祝、②安産祝儀、③宮詣（忌明）祝儀、④喰初祝儀、⑤誕生（生辰）之賀、⑥髪置之祝、⑦袴着之祝、⑧被初之祝、⑨手習初などを挙げている。これらは現代でいえば、①は帯祝い、②六日垂（六日剃）やお七夜などの安産祝い、③初宮参り、④お食い初め、⑤初誕生、⑥⑦⑧七五三、⑨小学校入学に該当する¹⁷⁾。

子どもの成長の祝いは、衣服や髪型で成長の段階を表し、贈答を行ったり庇護者を頼んだりすることにより、子どもを取り巻く社会関係を明らかにし、その人生を周囲に認めさせることが本来の目的である¹⁸⁾。氏神様への参詣は、子どもがその社会に認められたしるしである¹⁸⁾。

本研究では、儀礼に対する若者の認知度や理解度を図るために、産育儀礼の中から、日本の伝統である和服の着用機会のあるもの（あるいは着装などにその儀礼特有の風習があるもの）を検討することとした。理由は、人生儀礼では伝統的な衣服を身につけたり、願いを込めた料

理を作ったり共食したりするなど、各儀礼にまつわる食べ物や室礼、しきたりがあるからである^{1) 2)}。その中で、それぞれの儀礼に特有のもの・特徴的な性質を示すのは、食事(祝い膳)よりも服装と考えられる。加えて、伝統文化継承の視点からみた場合、近年、日常における着物離れが進んでいることが報告されている¹⁹⁾。人生儀礼においては礼服(和服)が正式であることが多いため、服装に着目することで、儀礼の理解度や関心などの継承性を図る指標となると考えられる。また、人生儀礼ごとに、服装の種類、色や柄、布の素材などについても意味を有していることから、これらの理解の程度を通して、現在の課題を把握するとともに課題解決に繋げることが期待できるといえる。以上のことから、産育儀礼のうち、出生前に行う「帯祝い」、出生後に行う「初宮祝い」、「七五三」を検討することとした。

(2) 帯祝い

帯祝いは、胎児の無事と成長・安産を祈る儀礼であり、赤ちゃんができて初めての祝いごとになる²⁾。安定期に入った妊娠5ヶ月目の戌の日に「岩田帯」と呼ばれる腹帯を巻いて祝う²⁰⁾。この頃には、妊娠がはっきりして、胎児の胎動が感じられるようになる。5ヶ月目ではなく、3ヶ月目・7ヶ月目に行う場合もある¹⁴⁾。正式には、妊婦の実家から腹帯を贈り、それを妊婦の腹に巻き、親類や近隣の人たちで祝う¹⁴⁾。戌の日に行うのは、犬が多産・安産でよく育つから、縁起を担いで定めた日であり、胎児の無事な成長と安産を願うという目的がある^{2) 14)}。

岩田帯の語源は「斎肌帯」(いはだおび)で、斎(イ)は「忌む」「もの忌み」を表す^{1) 21)}。昔は、お産は穢れたものとされていたため、妊娠5ヶ月目から忌み(お産の穢れに際して、一定期間他人から遠ざかり、外出を控えるなど身を慎むこと)に入る。腹帯をつけることで安産を願うとともに、母親自身に自覚を持たせる機会となり²¹⁾、浄化の意味も込められていた¹⁾。腹帯を巻く行為には、胎児の育ち過ぎを防ぐ、胎児を保護するという目的とともに、お産が軽く安産であるようにという信仰的な要素も含まれていたが、医学的には胎児には影響がないという結果が出ている²²⁾。一方、腹帯をするのは世界中で日本人だけであることから、腹帯に対する使用の仕方や信仰の中に、独自の産文化が見て取れる²²⁾ともいわれている。

戌の日に巻くようになったのは江戸時代以降であり、多産でお産が軽い犬にあやかっただけのことである²²⁾。他にも、犬は霊界とこの世を行き来できる動物と考えられていたことから、母と子を守ってもらいたいという祈りもあった^{1) 22)}。江戸時代以前は、やはり多産であった鼠にあやかり、縁起を担いで「子の日」に巻いていた^{1) 20) 22)}。

(3) 初宮参り(宮参り²³⁾、産明け²³⁾、産土神参²⁴⁾、氏子入り²⁴⁾ともいう)

初宮参りとは、赤ちゃんが生まれて初めて土地の氏神様に詣でて氏子として認めていただく氏神参りをいう^{1) 25)}。氏神様に参詣する目的は、出産の無事と生児の成長・長寿を祈る、氏子の仲間入りをさせてもらうことである^{20) 14)}。同時に、母親の産後のもの忌みが明けたことを祝う儀式でもあった¹⁾。産の忌みは、妊娠後5ヶ月の戌の日の帯祝い後から始まり、生児の初宮参りで終わるとするところが多い²²⁾。

初宮参りは生後1ヶ月ぐらいに行う儀礼で、男児32日目、女児33日目に行うところが多く、女児の忌みの方が少し長いと考えられている地方が多かった²²⁾。地方によっては7日目から100日目までと様々である^{14) 23)}。江戸時代、畿内のならわしでは、男児30日目、女児31日目(子忌み)、母親は75日目(親忌み)に参詣するとされていたが、一方で「地域の風習に従え

ば良い」とも記されており、その一例として「男児 32 日目、女児 33 日目」が挙げられている（『進物便覧』(隴西大隠)¹⁷⁾。30 日前後に宮詣する場合は、男女児の性別によって期日が異なるのが一般的であるが、その作法はほぼ一定していた¹⁷⁾。

上述したように、昔は、お産は穢れたものと考えられており、お宮参りで「忌み明け」とする区切りにもなっていた²⁰⁾。子どもには晴れ着（祝い着）を着せ、父方の祖母が抱いて餅や赤飯などを持って氏神様に参り、参詣後、親戚や知人へ挨拶に回り、出産の内祝いをするのがしきたりである²⁰⁾。子どもを抱くのは父方の祖母が原則となっているのは、母親はまだ「忌み明け」が済んでいないので抱けないというのが本来の意味であるが、現在では産後間もない母親の負担を軽減する思いやりと捉える傾向がある。

生後 30 日から 33 日が選ばれるのは、この頃になって産婦の「産の忌み」が明けるからであり、それまでは氏神様との対面が許されないといわれている²⁾²⁶⁾。江戸時代、100 日までは白い小袖、101 日目から色直しといって産婦・生児ともに色小袖をつけ、この後 37 日を経て、吉日を選んで宮参りをしたという（『貞丈雑記』³⁾。現在でも地方によっては、30 日の宮参りは鳥居まで、75 日あるいは 100 日経って初めて神前まで入るところがある。これはいずれも産婦の忌の期間が明けて、つまり、産屋明けをまって、神社に参るためと考えられている³⁾。近年は、氏神様への信仰や忌み明けの行事というよりは、子の幸福を願う親の気持ちの表れとして行われるようになってきている²⁶⁾。

（4）七五三

七五三とは、氏神様に子どもの無事な成長と幸せを祈る行事²⁰⁾であり、晴れ着を着せて神社に詣でる²⁾⁴²⁾。3歳は髪形を改める「髪置」、5歳は初めて袴をつける「袴着」、7歳はつけ紐を取って初めて本式の帯を締める「帯解」といい、地方により異なるが、3歳は男女児、5歳は男児、7歳は女児が行うのが一般的である²⁾¹⁴⁾²⁰⁾²¹⁾。元々は宮中や公家、武家の風習であり、かつては子どもの成長を感謝して氏神様に参詣するだけの質素な儀礼だったが、徐々に形式化され²²⁾、現在は子どもの祝い事の中で最も華やかなものとして子ども時代の一大イベントとして定着している²⁰⁾。

11月15日に七五三を行うのは、11月がめでたい月であったこと²⁾、旧暦の15日は必ず満月であったこと²⁾、旧暦11月15日は鬼が自分の家にいる鬼宿日²⁰⁾（婚礼以外は万事に大吉とされる日）にあたるため、鬼のいぬ間に厄祓い（子どもの厄年は3歳、5歳、7歳）と神の御加護を願ったこと²⁰⁾など諸説ある。

「7歳までは神の子」というように、日本人は子どもに対して特別な扱いをしてきた²³⁾。昔は子どもが早逝することが多かったため、七五三を祝う親の心は今より切実であり、七五三はお祝いであるとともに、子どもの厄を祓うものでもある²¹⁾。

また、七五三の背景には「七つ子祝い」もある²⁷⁾。幼児は7歳まで神様の庇護下にあり、何をしてもちちは当たらない代わりに、いつ病気や事故で死ぬかもしれない存在であり、大人のような儀式は必要ないと考えられていた²⁷⁾。7歳のお祝いをするのは、庇護下の幼児の立場から、神様を祀る側（大人）になるとされたこと、すなわち、甘えはもう許されないということを示す²⁶⁾。

以下、各儀礼について実施状況（実施年齢、日にち、祝いの形式など）を調査した。これにより、若者世代の人生儀礼に対する現状を把握するとともに課題を明らかにしていく。

3. 方法

(1) 調査対象・調査方法

大学生における人生儀礼および年中行事に対する意識と実態について検討した。調査対象はS大学教育学部学生1年生とし、内容の異なる質問紙調査（無記名自記式）を2回実施した。

1回目の調査は、人生儀礼と年中行事全般に関するこ

と（2016年4月、313名）、2回目の調査は、年中行事のうち、節句に関することを検討した（2016年10月、229名）。回答は選択式（一部自由記述）とした。両調査の有効回収率・有効回答率はいずれも100%であった。また、人生儀礼や年中行事は、地域において実施内容（実施時期や対象者の年齢や性別、祝い方など）が異なることから、調査対象者の属性に関する質問項目を設け、選択肢の中から回答してもらった。調査対象者の出身地の一覧を表1に示す。本稿では、人生儀礼の中の産育儀礼「帯祝い」「初宮参り」「七五三」について報告する。

得られたデータは、 χ^2 検定、マン・ホイットニーのU検定などにより、分析を行った。

(2) 調査項目および調査内容

1) 帯祝いについての認知度および理解度

(a) 帯祝いの認知度

子どもの人生儀礼には、出生前（妊娠中）のものと出生後のものがある。帯祝いは、妊娠して最初に行われる安産祈願の儀式である²⁵⁾。「帯祝い」の認知度を検討するため、「帯祝いを知っていますか」という質問に対して「知っている、知らない」のいずれかを選択してもらい、「知っている」者を認知群とし、その割合を認知度とした。

(b) 帯祝いの理解度（祝う時期、祝いの対象者、込められた願い）

帯祝いの理解度を図るために、祝い方（時期、対象者、願い）について検討した。

祝う時期として「帯祝いを行う時期はいつですか」、祝いの対象者として「帯を巻かれる人は誰ですか」と質問した。前者については、「妊娠5ヶ月目、妊娠10ヶ月目、生まれた日、生後3日目、生後7日目、わからない」から1つ選択してもらった。後者については、「父親、母親、男児、女児、わからない」から当てはまると思うもの全てを選択してもらった。

帯祝いに込められた願いについて、「安産祈願、成長祈願、無病息災、家内安全、厄祓い、わからない」から当てはまると思うもの全てを選択してもらった（複数回答）。

2) 初宮参りについての認知度および理解度

(a) 初宮参りの認知度

出生後の子どもに関する産育儀礼として、「初宮参り」を検討した。認知度は「初宮参りを知っていますか」という質問に対して「知っている、知らない」からいずれか1つを選択してもらい、「知っている」と回答した者の割合を認知度とした。

表1 調査対象者の出身県

地区区分	県	人数			%		
		全体 (n=313)	男子 (n=144)	女子 (n=169)	全体 (n=313)	男子 (n=144)	女子 (n=169)
中部	静岡	221	91	130	70.6	63.2	76.9
	愛知	23	14	9	7.3	9.7	5.3
	岐阜	5	3	2	1.6	2.1	1.2
	山梨	10	8	2	3.2	5.6	1.2
	長野	5	4	1	1.6	2.8	0.6
近畿	三重	5	3	2	1.6	2.1	1.2
	京都	2	0	2	0.6	0	1.2
他	その他	42	21	21	13.4	14.6	12.4

(b) 初宮参りの理解度（祝う時期、込められた願い、祝い着の柄）

初宮参りの理解度を図るために、祝い方（時期、願い、祝い着）について検討した。

祝う時期として「初宮参りは、子どもが生まれてから、いつ行われると思いますか」と質問し、「誕生 30 日目、31 日目、32 日目、33 日目、34 日目、わからない」から、男児・女児それぞれについて1つ選択してもらった。

初宮参りに込められた願いについて、「誕生報告、無病息災、けがれ落とし、成長祈願、厄祓い、わからない」から当てはまると思うもの全てを選択してもらった。

初宮参りの際の「祝い着」の柄としてふさわしいものを質問した。男児は「家紋、無地、亀、鷹、鶴、猪、わからない」、女児は「家紋、無地、鶴、千鳥、花柄、手まり、わからない」の中から当てはまると思うもの全てを選択してもらった。

3) 七五三についての認知度および理解度

(a) 七五三の認知度と経験率

七五三の認知度は「七五三を知っていますか」という質問に対して「知っている、知らない」から1つを選択してもらい、「知っている」と回答した者の割合を認知度とした。また、認知度が高かったことから、経験の有無を知るため、「七五三に行ったことがありますか」という質問に対して「ある、ない」のいずれかを選択してもらい、「ある」と回答した人を経験率とした。

(b) 経験者における七五三の理解度（祝う年齢、祝う日（参詣日）、参詣時の服装）

七五三について、経験者は男子 128 人、女子 169 人であった。そこで、経験者を対象に、七五三に関する理解度（年齢、参詣日、服装）を検討することとした。

祝う年齢について、「七五三に行った年齢」を「3 歳、5 歳、7 歳」の中から選択してもらった（複数回答）。

祝う日として、七五三を行った日（参詣日）を質問した。回答は「9 月 15 日、9 月 30 日、10 月 15 日、10 月 30 日、11 月 15 日、11 月 30 日、分からない」の中から1つ選択してもらった。

七五三に参詣する時の服装について、男児は「着物と袴、着物と羽織と袴、水干、スーツ、普段着、覚えていない」、女児は「着物、着物と被布、ワンピースドレス、スーツ、普段着、覚えていない」から選択してもらった（複数回答）。ここでは服装の写真を見せて選択してもらった。尚、水干とは平安時代の男子の装束の衣装²⁸⁾で、室町時代には礼装となっている²⁹⁾。水干は、袴の上に闕腋袍（けてきあわせ：両脇の袖付けの下を縫い合わせないで開け広げたままの袍）³⁰⁾を着る。通常は上衣の裾を袴に籠めて着装するが、狩衣のように袴の上に着て帯を締める着装（掛水干）もある^{29) 31) 32)}。

(c) 七五三の理解度（全員対象：子どもに着せたい服装、込められた願い）

未経験者（男子 16 人）も含めて全員（男子 144 人、女子 169 人）を対象に、「将来、七五三で自分の子どもに着せたい服装」を、男児・女児に分けて上記同様に選択してもらった（複数回答）。また、七五三に込められた願いについて、「延命長寿、五穀豊穰、成長祈願、家内安全、無病息災、祖先崇拝、天下泰平、交通安全、子孫繁栄」の中から当てはまると思うものを全て選択してもらった。

4. 結果および考察

(1) 帯祝いについての認知度および理解度

1) 帯祝いに対する認知度

出生前の子どもの最初の人生儀礼である帯祝いに対する認知度を検討した。「知っている」と答えた認知群は1%と著しく少なかった(全体 1.0%, 男子 1.4%, 女子 0.6%) (図1)。

認知度が低かった理由として、調査対象者が学生であり、現段階では妊娠・出産・子育てなどに対する意識が低いと考えられる。加えて、儀礼を行う日も関係していることが推察される。人生儀礼を行う日には2種類ある。年に一回決まった日にちに行われるものと、日にちが決まっていないものである。前者には七五三など、後者には帯祝いや初宮参りなどがある。帯祝いは日にちが決まっておらず、妊娠の時期により異なる。昔は腹帯を「帯親」に巻いてもらい、仲人や近親者を招いて祝いの席を設けた²²⁾。腹帯を巻く人は一定しておらず、産婆、仲人、妊婦の母親、子運のいい人、お産の軽かった人、丈夫な子どもを育てている人など経験を積んだ人を「帯親」に頼み、締めてもらうことも多かった^{22) 23)}。腹帯を締める帯祝いは妊娠したことを正式に社会に披露する場であり、その祝宴での共食は、生児の生存権を認める最初の儀礼であり³⁾、食事を共にした人々の力を借りて母子ともに無事に出産が終わるように祈ったものと考えられている^{1) 21) 22)}。一方、近年は正式な帯祝いの儀式をするケースが少なくなり、夫婦のみ、またはその両親だけで祝い膳を囲むことが増えている²⁰⁾。そのため、親戚に妊婦がいても、こうした行事が実施されない、あるいは参加しないのが通常である。以上のことから、大学生における認知度が低いと考えられる。

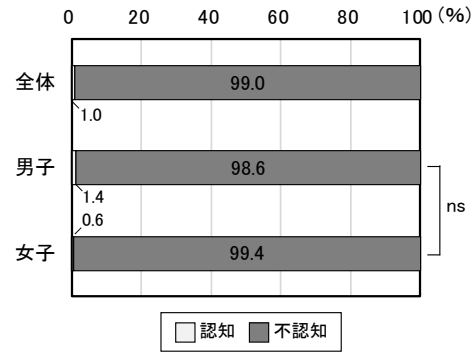


図1 帯祝いに対する認知度

帯祝いに対する認知度を調査した(男子144人、女子169人)。男女間の有意差は、 χ^2 検定を用いた(* $p < 0.05$, ** $p < 0.01$, ns: not significant)。

2) 帯祝いの祝い方に対する理解度

(a) 帯祝いを行う時期

帯祝いは妊娠5ヶ月目の祝いをいう。帯祝いを行う時期について検討した(表2)。

約4割が「わからない」と答えていた。正答率は、男子は女子よりも低かった(全体 9.9%, 男子 5.6%, 女子 13.6%, $p < 0.01$)。

誤答で最も多かったのは「生後7日目」であり、男女において同様の傾向が見られた(全体

表2 帯祝いを行う時期

内容	人数			%			有意差
	全体 (n=313)	男子 (n=144)	女子 (n=169)	全体 (n=313)	男子 (n=144)	女子 (n=169)	
妊娠5ヶ月目	31	8	23	9.9	5.6	13.6	**
妊娠10ヶ月目	34	12	22	10.9	8.3	13.0	
生まれた日	15	9	6	4.8	6.3	3.6	
生後3日目	32	20	12	10.2	13.9	7.1	*
生後7日目	58	28	30	18.5	19.4	17.8	
わからない	139	66	73	44.4	45.8	43.2	
無回答	4	1	3	1.3	0.7	1.8	

「帯祝いを行う時期」を回答してもらった。太字が正解である。

男女間の有意差は χ^2 検定により行った(男子144人、女子169人。* $p < 0.05$, ** $p < 0.01$)。

表3 帯を巻かれる人(複数回答)

内容	人数			%			有意差
	全体 (n=313)	男子 (n=144)	女子 (n=169)	全体 (n=313)	男子 (n=144)	女子 (n=169)	
母親	60	16	44	19.2	11.1	26.0	**
父親	8	7	1	2.6	4.9	0.6	**
男児	110	56	54	35.1	38.9	32.0	
女児	70	31	39	22.4	21.5	23.1	
わからない	60	30	30	19.2	20.8	17.8	
無回答	7	4	3	2.2	2.8	1.8	

「帯を巻かれる人」を回答してもらった(複数回答)。太字が正解である。男女間の有意差は χ^2 検定により行った(男子144人、女子169人。* $p < 0.05$ 、** $p < 0.01$)。

18.5%、男子19.4%、女子17.8%)。男子は、出生後(生まれた日、生後3日目、生後7日目)が合わせて39.6%であり、出生前(妊娠5ヶ月目と妊娠10ヶ月目)の合計(13.9%)よりも有意に高かった($p < 0.01$)。女子は出生後が28.4%、出生前が26.7%でほぼ同数であり、両者で有意差はみられなかった。

全体で見ると、帯祝いは「出生後に行く」というイメージを持っている人が多いといえる。「生後7日目」の回答が多かったが、実際には、生後7日目に行く祝いは「お七夜」である。お七夜とは、生まれた日から数えて7日目に命名書を飾って祝うもので、正式には命名書を名づけ親が作り、三方(さんぼう)にのせて神棚に飾り²⁰⁾、赤飯や尾頭つきの鯛で祝う²⁾。いずれも重要な人生儀礼であるが、祝いの時期や対象者を正しく認識できていないことから、これら人生儀礼に対する理解や知識が不足しているといえる。

(b) 帯を巻かれる人(祝いの対象者)

帯祝いをされる対象者に対する理解の程度を検討した。尚、「男児・女児」は生児を示す。

「帯を巻かれる人は誰ですか」という質問に対して、正答である「母親」を選んだ割合は低かった(全体19.2%、男子11.1%、女子26.0%) (表3)。全体で最も多かった回答は「男児」35.1%、次いで「女児」22.4%であり、「男児」と「女児」の間に有意な相違が見られた($p < 0.01$)。男女においても同様の傾向が見られ、男子は「男児」38.9%、「女児」21.5%、「母親」11.1%の順であり、男児・女児・母親の3者間で有意な相違がみられた。男子は、帯祝いは「生まれた男児」のためと考えているといえる。一方、女子は「男児」32.0%、「母親」26.0%、「女児」23.1%の順であり、3者間で有意差はなかった。

回答で特徴的だったのは、「母親」よりも「生児」(男児・女児の合計)と回答した人が多かったことであり、「母親」と「生児」の間に相違が見られた(全体・男子・女子全てで有意差あり、 $p < 0.01$)。先の結果も合わせると、大学生は男女問わず、祝われる対象(帯を巻かれる対象)は「母親」でなく、出生後の「子ども」(男児)と考えているといえる。

これは、男児(長男)が優遇される古い慣習の名残と思われる。戦前、農業社会にあった我が国では家父長的制度が強く、長男は跡取りとして優遇されていた³³⁾。社会構造が変化した現在でも、その慣習は今なお残っているとされている³⁴⁾。こうした慣習の名残が、帯祝いに対しても反映され、「祝いの対象は男児」という回答が多くなったと考えられる。

(c) 帯祝いに込められた願い

儀礼には意味があり、願いが込められている。そこで、「帯祝いに込められている願い」を、選択肢の中から回答してもらった(複数回答可)。正解は「安産祈願」「成長祈願」である。

表4 帯祝いに込められた願い(複数回答)

願い	人数(複数回答)			% (複数回答)			有意差
	全体 (n=313)	男子 (n=144)	女子 (n=169)	全体 (n=313)	男子 (n=144)	女子 (n=169)	
成長祈願	123	56	67	39.3	38.9	39.6	
安産祈願	98	31	67	31.3	21.5	39.6	**
無病息災	75	35	40	24.0	24.3	23.7	
厄祓い	23	10	13	7.3	6.9	7.7	
家内安全	13	9	4	4.2	6.3	2.4	
わからない	76	44	32	24.3	30.6	18.9	**
無回答	3	1	2	1.0	0.7	1.2	

「帯祝いに込められた願い」について、複数回答で選択してもらった。太字を正解とした。
男女間の有意差は χ^2 検定により行った(男子144人、女子169人。* $p < 0.05$, ** $p < 0.01$)。

最も多かったのは、全体で「成長祈願」(39.3%)であり、男女とも同様の傾向が見られた(男子38.9%, 女子39.6%, 表4)。次いで、「安産祈願」であり、女子は男子より有意に高かった(男子21.5%, 女子39.6%, $p < 0.01$)。

帯祝いは、母親の妊娠中に行うものであり、安産と胎児の無事の成長を願う。込められた願いを「安産祈願」(男子21.5%, 女子39.6%)とした割合は、祝いの対象を「母親」とした割合(男子11.1%, 女子26.0%)より有意に高かった(男子 $p < 0.05$, 女子 $p < 0.01$)。つまり、込められた願いとその対象とが一致しておらず、本儀礼の意味を十分に理解していないといえる。帯祝いを行う時期、祝いの対象、願いの3者全てを正解した割合は全体で6.1%, 男子2.8%, 女子8.9%であり、正答率は低かった。このことから、帯祝いに対する大学生の認知度は低く、帯祝いは「出生後の子どもの誕生や成長」を祝うための儀礼という、誤ったイメージを持っているといえる。

帯祝いを戌の日に行うのは、安産で多産な犬にあやかろうとしたもので、科学的根拠はない²⁾。安定期に腹帯を締めることに対する医学的効果もまだ立証されていない³⁵⁾。一方で、心身ともに不安定な妊娠初期を乗り切った時期にお腹を保護する腹帯を巻くのは、現代でも納得できる方法といわれている²⁰⁾。また、妊婦に母親としての自覚を促す精神的効果もあり²¹⁾、子どもがこの世に生を受けてから初めての儀式という意味も有する²⁰⁾。國分¹²⁾は、帯祝いを行うことにより、妊婦は家族や親戚など周囲に無事に妊娠できたことを報告できるとともに、周囲からは育児に関する助言をもらえることから、本慣習を肯定的に捉え、積極的に実施しているとしている。また、謂れを知らぬまま実行した母親に対しては、謂れを確かめるよりも腹帯を巻くという慣習を行うことによって安心感を求めているのではないかと推測している¹²⁾。長鶴³⁶⁾は「母親が気持ちの上で安心するからという精神的安寧への欲求は、助言の受け止めや次世代への伝承を促進」する重要な要因と述べている。倉石²²⁾は、「締めたり結んだりすることに対する伝統的な考え方を、現代の妊婦達も無意識のうちに行為として継承していることが分かる」としている。これらのことから、現代における腹帯には、医学的な意味合いよりも、文化的な意味合い、つまり古代から続いてきた腹帯の習慣の伝統的な意味合いが深く含まれており³⁵⁾、母親としての自覚や妊娠・出産に対する安心など精神的効果が大きいと考えられる。

近年、正式な帯祝いの儀式を行うケースは少なくなり、実施の簡略化・省略化が指摘されている³⁷⁾。また、妊婦は儀礼の謂れなど理解しないまま実施している場合もある¹²⁾。一方、医療が発達した現代においても、妊娠や出産により女性は心身ともに大きな影響を受ける。帯祝い

など妊娠に関わる人生儀礼について、その謂れや意味、科学的根拠を合わせて親から子へと伝えていくことで、安心して妊娠・出産を迎え、心身ともに充実した生活を営むことができると考えられる。そのためには、こうした人生儀礼について、学ぶ機会が必要といえる。

(2) 初宮参りについての認知度および理解度

1) 初宮参りに対する認知度

初宮参りに対する認知度を検討した。

「知っている」と答えたのは全体 18.5%、男子 6.9%、女子 28.4%であり、女子は男子より有意に

高かった ($p < 0.01$) (図2)。帯祝いと比較すると、初宮参りの方の認知度は有意に高かったが ($p < 0.01$)、いずれも過半数に満たなかった。

これは、「帯祝い」同様、調査対象者が学生であり、妊娠・出産・子育てなどに対する意識が低いことや、核家族化の進行によって親戚づきあいや近所づきあいが少なくなり、日常において見聞きした体験が極めて少ない、あるいは、無いためと考えられる。

2) 初宮参りの祝い方に対する理解度

(a) 初宮参りを行う参詣日

初宮参りを行う日について、男児・女児、それぞれについて回答してもらった。初宮参りは性別により異なり、一般には、男児 31 日目、女児 32 日目といわれる。一方、地域により相違が多い。そこで文献調査を行った。一般書籍に記載されている日にちを表5に示す。本稿では、男児「生後 30~32 日目」、女児「31~33 日目」のいずれかを選択した場合を正解とした。

まず、正答についてみると、男児 (30~32 日目) では、「30 日目」が最も多く、全体で 32.9%であった (表6)。一般的な男児の参詣日とされる「31 日目」は全体で 8.6%であり、30 日目と比べて有意に低かった ($p < 0.01$)。「32 日目」は 31 日目よりさらに低く ($p < 0.01$)、全体で 2.2%であった。男女においても同様の傾向を示した。「30~32 日目」を選択した合計は、全体 43.8%、男子 47.9%、女子 40.2%であり、男女間で有意差は見られなかった。

女児 (31~33 日目) では、「31 日目」が最も多く、全体で 14.7%であった (表6)。一般的な女児の参詣日とされる「32 日目」は全体で 4.2%と著しく低く、31 日目と有意な相違が見られた ($p < 0.01$)。「33 日目」は 32 日目と同様に低く ($p < 0.01$)、全体で 6.7%であった (31 日目と 32 日目で有意差なし)。男女においても同様の傾向を示した。「31~33 日目」を選択した合計は、全体 25.6%、男子 30.6%、女子 21.3%であり、男女間で有意差は見られなかった。

男児における正答率と女児における正答率を比較すると、全体・男子・女子とも前者の方が有意に高かった。一方、男児・女児いずれにおいても、「わからない」の割合が男女とも約半数を占めており、こうした儀礼の祝い方に対する理解が不足していると考えられる。

正答率について、男児の方が女児より高かった理由として、「30 日目」という区切りの良さがあることや、「30 日目」が男児では正答に該当することが考えられる。例えば女子は、男児・女児の間で「30 日目」の回答割合に有意差がないことから、区切りの良い「30 日目」を男児・

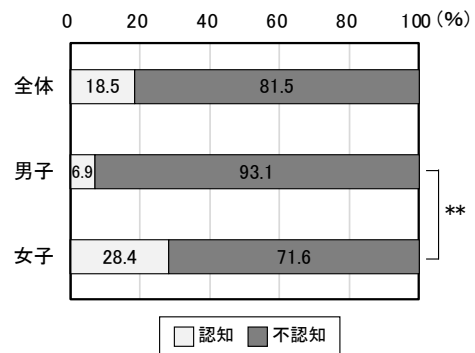


図2 初宮参りに対する認知度

初宮参りに対する認知度を調査した(男子144人、女子169人)。男女間の有意差は、 χ^2 検定を用いた(* $p < 0.05$, ** $p < 0.01$)。

表5 初宮参りの参詣日に関する文献調査

参詣日(日目)		備考	文献 番号
男児	女児		
30	31	地域によって異なる(男児32、女児33日目)。奈良ではかつては生後11日目または30日目に行く地域が多かった。	17)
30	31	地域により50日目、100日目などがある	20)
30	31	男の子なら30日目、女の子は31日目と日を違えている地方が多い。	38)
30	33	古くは100日を過ぎてからであった。現在も地方により異なる(30日の宮参りは鳥居まで、75日あるいは100日経って初めて神前まで入るところがある)。	3)
30~32	31~33	地域により異なる	21)
31	33		24)
31	33		41)
32	33		1)
32	33		2)
32	33	地方によっては7日目から100日目までと様々	14)
32	33		15)
32	33	男児と女児が逆の場合もある。女の子が遅いのは汚れが多いからだとか、男の子が遅いのは女の子より結婚が遅いからだの、地方によってさまざまな解釈がなされている。日どりは、男児が女児によって違うと同時に、地方によって差があり、早いところではお七夜に行うところがあったり、モモカマイリ(百日参り)などといって100日目を超えるところもあった。	22)
32	33	早いところで7日目、遅いのは100日目もある。	23)
32	33		39)
32	33	性別や地域によって異なる。	40)
30~33		地方によっては7日目から100日目と差がある。	26)

※空欄は、参詣日などに補足説明がないことを示す。

女児両方に選んだと考えられる。一方で、男子は「30日目」を選んだ割合が、男児と女児で有意に異なっていた($p < 0.01$)。このことから、男子は男児・女児で日にちが違うことを知っており、30日目以外の日にちを選んだとも考えられる。これについては、さらに詳細に検討する必要があるといえる。

(b) 初宮参りの願い

「初宮参りに込められた願い」について検討した(複数回答)。正解は「誕生報告」「成長祈願」「無病息災」である。

最も多かったのは、全体で「誕生報告」(54.0%)であり、「成長祈願」「無病息災」と続いた(表7)。男女とも同様の傾向が見られたが、「誕生報告」「成長祈願」の回答率は、女子の方が男子より20%近く高かった($p < 0.01$)。

(c) 初宮参りの祝い着の柄

初宮参りの際に子どもが着用する「祝い着」としてふさわしい柄を質問した(複数回答)。

正答について、男児・女児別にみていく。まず、男児は、全体では「家紋」が最も多く(39.4%)、次いで、「鶴」「亀」「鷹」と続いた(表8)。男女とも同様の傾向が見られた。

女児は、全体と女子では「鶴」が最も多かった(全体22.4%、女子27.2%)。一方、男子は「花柄」が最も多く(25.0%)、男女間で「鶴」と「花柄」の回答に相違が見られた($p < 0.01$)。

表6 初宮参りを行う日(参詣日)

男女	日にち	人数			%			有意差
		全体 (n=313)	男子 (n=144)	女子 (n=169)	全体 (n=313)	男子 (n=144)	女子 (n=169)	
男児	30日目	103	49	54	32.9	34.0	32.0	
	31日目	27	17	10	8.6	11.8	5.9	
	32日目	7	3	4	2.2	2.1	2.4	
	33日目	10	8	2	3.2	5.6	1.2	*
	34日目	3	2	1	1.0	1.4	0.6	
	わからない	157	63	94	50.2	43.8	55.6	*
	無回答	6	2	4	1.9	1.4	2.4	
女児	30日目	69	26	43	22.0	18.1	25.4	
	31日目	46	27	19	14.7	18.8	11.2	
	32日目	13	6	7	4.2	4.2	4.1	
	33日目	21	11	10	6.7	7.6	5.9	
	34日目	13	8	5	4.2	5.6	3.0	
	わからない	146	62	84	46.6	43.1	49.7	
	無回答	9	4	5	2.9	2.8	3.0	

「初宮参りを行う日」を、男児・女児それぞれに分けて回答してもらった。太字の日にちを正解とした。男女間の有意差は χ^2 検定により行った(男子144人、女子169人。* $p < 0.05$, ** $p < 0.01$)。

表7 初宮参りに込められた願い(複数回答)

願い	人数(複数回答)			%(複数回答)			有意差
	全体 (n=313)	男子 (n=144)	女子 (n=169)	全体 (n=313)	男子 (n=144)	女子 (n=169)	
誕生報告	169	57	112	54.0	39.6	66.3	**
成長祈願	151	50	101	48.2	34.7	59.8	**
無病息災	103	49	54	32.9	34.0	32.0	
けがれ落とし	75	41	34	24.0	28.5	20.1	
厄祓い	59	25	34	18.8	17.4	20.1	
わからない	53	34	19	16.9	23.6	11.2	**
無回答	2	2	0	0.6	1.4	0.0	

「初宮参りに込められた願い」について、複数回答で選択してもらった。太字を正解とした。男女間の有意差は χ^2 検定により行った(男子144人、女子169人。* $p < 0.05$, ** $p < 0.01$)。

これは、男子にとって「花柄」は女児のイメージが強いためと考えられる。また、女子が「鶴」を選択する人が多かったのは、「鶴」が吉祥文様の象徴であり、めでたさを表すことから、こうした祝いの儀礼にふさわしいと考えたと推測される。

男児・女児いずれに対しても、無地を選ぶ人が約2割程度おり、いずれも女子の方が男子より有意に多かった。また、女児においても家紋を選ぶ人が全体で17.9%であった。

初宮参りでは、主役である赤ちゃんも着飾る⁴¹⁾。無地の内着の上に、豪華な「祝い着」をかいた姿が、生後初めての正装である⁴¹⁾。正式には、内着は、白羽二重という白絹の「一つ身」(背縫いをしない乳児の着物)の着物とし、その上の祝い着は、男児は黒地に松や鶴、鷹などの縁起物の絵柄や武者などの勇壮な絵柄を横向きに入れた熨斗目模様の羽二重紋付きとし¹⁾、女児はピンクや朱色地に²¹⁾花柄の友禅など華やかなものである^{20) 24)}。家紋については、現代は男児のみに入れ、女児には家紋は入れないのが一般的である。これは、女児の場合、そのまま祝い着としての役目を果たすことや、柄が家紋を配する場所までであることから、家紋との

表8 初宮参りの祝い着の柄(複数回答)

男女	内容	人数(複数回答)			% (複数回答)			有意差
		全体 (n=313)	男子 (n=144)	女子 (n=169)	全体 (n=313)	男子 (n=144)	女子 (n=169)	
男児	家紋	123	64	59	39.3	44.4	34.9	**
	鶴	68	25	43	21.7	17.4	25.4	
	亀	45	21	24	14.4	14.6	14.2	
	鷹	36	18	18	11.5	12.5	10.7	
	猪	4	2	2	1.3	1.4	1.2	
	無地	61	21	40	19.5	14.6	23.7	*
	無回答	18	9	9	5.8	6.3	5.3	
女兒	鶴	70	24	46	22.4	16.7	27.2	**
	花柄	50	36	14	16.0	25.0	8.3	**
	手まり	37	12	25	11.8	8.3	14.8	
	千鳥	56	24	32	17.9	16.7	18.9	
	家紋	51	29	22	16.3	20.1	13.0	
	無地	66	21	45	21.1	14.6	26.6	**
	無回答	18	10	8	5.8	6.9	4.7	

「初宮参りの子どもの祝い着」の柄について、複数回答で選択してもらった。正解を太字で示す。
男女間の有意差は χ^2 検定により行った(男子144人、女子169人。* $p < 0.05$, ** $p < 0.01$)。

干渉を避けるためである。尚、江戸時代は、男児は熨斗目羽織、紋付衣、女兒は下着赤、上着紋付とある¹⁷⁾が、現在は上記理由より、女兒は紋を付けないとされる。祝いの種類や対象、着用する性別などによって、着物の素柄の種類や布素材が変わることから、儀礼を通して和服や礼服の知識を得たり理解を深めたりすることができる。これにより、人生儀礼という伝統文化を多角的・多面的に捉えることができ、伝統文化の理解・継承・発展に繋がるといえる。

(3) 七五三についての認知度および理解度

1) 七五三の認知度と経験率

七五三の認知度は、他の産育儀礼に比べて顕著に高かった(全体98.7%, 男子97.2%, 女子100%)。七五三に行った経験があるかを調査したところ、男子88.7%, 女子100%であり(図3)、経験者が著しく多かった(男女間で有意差あり, $p < 0.01$)。

そこで、以下、経験の有無により、七五三の祝い方(年齢、参詣日、服装)の理解度を検討することとした。尚、未経験者は男子のみ(144人中16人)であった。女子は全員が経験者であった。

2) 経験者における七五三の理解度

(a) 七五三を祝う年齢

七五三に行った年齢を「3歳、5歳、7歳」の中から選択してもらった。対象は経験者とした。七五三は、男児は3歳と5歳、女兒は3歳と7歳に行うのが一般的とされるが、地域により年齢や回数が異なる。そのため、男児5歳のみ(または

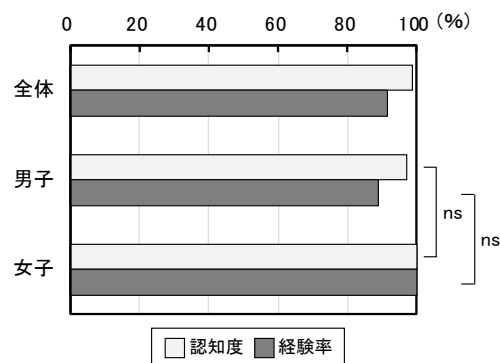


図3 七五三の認知度と経験率

七五三の認知度と経験率した(男子144人、女子169人)。男女間の有意差は、 χ^2 検定を用いた(* $p < 0.05$, ** $p < 0.01$, ns: not significant)。

表9 七五三に行った年齢(経験者)

項目	男子(n=128)		項目	女子(n=169)		
	人	%		人	%	
正答	3歳と5歳	24	18.8	3歳と7歳	71	42.0
	5歳のみ	43	33.6	7歳のみ	13	7.7
	3歳のみ	21	16.4	3歳のみ	12	7.1
行く年齢 が違う (誤答)	3歳と5歳と7歳	26	20.3	3歳と5歳と7歳	44	26.0
	5歳と7歳	5	3.9	5歳と7歳	6	3.6
	3歳と7歳(女子)	2	1.6	3歳と5歳(男子)	10	5.9
	7歳のみ(女子)	1	0.8	5歳のみ(男子)	10	5.9
無回答	6	4.7	無回答	3	1.8	

「七五三に参加したことがある」と回答した人を対象に、「実際に七五三に行った年齢」を回答してもらった(男子128人、女子169人)。

3歳のみ)、女兒7歳のみ(または3歳のみ)の選択も正解とした。

正答の割合は、男子68.8%、女子56.8%であり、男子の方が有意に高かった($p < 0.05$) (表9)。正答のうち、男子で最も多かったのは「5歳のみ」(33.6%)であり、次いで「3歳と5歳」(18.8%)であった。女子は「3歳と7歳」(42.0%)が最も高く、「3歳のみ」「7歳のみ」は各7%であった。

男子において、「5歳のみ」「3歳と5歳」という2つの答えが多かったのは、男児の七五三を祝う年齢が地域によって異なるためと考えられる。東日本、特に関東地方は5歳だけの1回、西日本、特に関西地方は3歳と5歳の2回という傾向が強いとされるが、最近の七五三を祝う年齢は、男児は3歳と5歳(または5歳)、女兒は3歳と7歳に行く⁴²⁾。

一方、各地の子どもの成長の祝いを見ると、地域によって異なる年齢で別々の機会に行われていることもある。例えば、埼玉県には7歳で帯解き(紐解き)を行い、5歳の祝いは行わない地域もある¹⁸⁾。また、3歳、5歳、7歳は子どもの厄年とされることから、福岡県の一部地域では、男女児ともに7歳に厄除・長寿息災を願う祭りがあり、大人の下着をつけて祝う儀式(男児「へこかき」、女兒「ゆもじかき」)がある⁴³⁾。7歳の祝いは、この年齢が幼児期の最後に当たるため、男女とも重要な折り目とされてきた¹⁸⁾。

上述したように、一般にお祝いをする年齢は男女で異なっている。不正解である年齢(男児7歳、女兒5歳)の回答率は、男子で26.6%、女子で41.4%であった($p < 0.01$)。男児「7歳」や女兒「5歳」の選択をした人の出身地を見たところ、大半が静岡県出身であったことから、地域性によるものではなく、誤答と思われる。これは調査対象者に兄弟姉妹がいた場合は、その七五三に同行することが考えられる。七五三では同行する家族も礼服を着るのがしきたりとなるため、兄弟姉妹と同様に晴れ着での参詣が考えられる。この場合、「自分の七五三」と勘違いして祝う年齢を間違えたり、全ての年齢に参加するものと誤って認識したりするなどが考えられる。誤答が多かったのは、経験者が「いつ・誰が・なぜ行うのか」を正しく認識しておらず、「3歳、5歳、7歳のいずれかで行うもの」と認識しているためと考えられる。

(b) 七五三を行う日(参詣日)

七五三を行う日を検討した。一般的には11月15日であるため、これを正答とした。

正答率は低く(全体17.3%、男子6.9%、女子26.0%)、男子は女子より有意に低かった($p < 0.01$, 図4)。また、男女とも「分からない」と答える人が多かった(全体74.4%、男子81.3%、

女子 68.6%)。このことから、七五三の参詣日に
関して、男女とも理解が低いといえる。

正答率が低かったことや、「分からない」とい
う人が多かったこと理由として、3つ挙げられ
る。第一に、この行事が幼児期に行われるため、
自分の経験の記憶がないため(または曖昧である
ため)と考えられる。第二に、成長して物心がつ
くようになっていても、兄弟姉妹がいなければ、
この行事を意識する機会が日常では殆どないと
推測される。第三に、現代は、共働き家庭や片親
家庭の増加など家族形態や生活のあり方など社
会の変化により、当該日に行うのが難しくなっ

ていることである。子どもも保育園・幼稚園・学校などが必ずしも休日とは限らないため、必然
的に家庭によって参詣日はバラバラになると思われる。

田口⁴⁴⁾は、小学生の児童をもつ親を対象とした調査から、11月1～14日の間の土日祝日に
祝うことが多いことを報告している。つまり、近年は家族の都合の良い日に実施されることが
増えていることから、正式の日(11月15日)の認知が低かったと考えられる。

(c) 七五三に参詣した時の服装

七五三は、子どもの成長を願うハレの日の行事である。そのため、参詣する際の服装は晴れ
着であり、年齢に応じて着用する着物も異なる。そこで、経験者を対象として、七五三に参詣
した時の服装を検討した。

和装と洋装を比較すると、男女とも和装が多かった(いずれも $p < 0.01$) (表 10)。和装のう
ち、男子は「着物、羽織、袴」の正式な礼装が最も多く、女子は「着物」が最も多かった。

内田⁴⁵⁾は、七五三における男子の和装は年々増加傾向にあると報告している。特に男子は女
子に比べ、羽織・袴以外に、兜・鎧、袴(かみしも)、烏帽子・狩衣(かりぎぬ)など、和装の
多様化が進んでいることも和装化が進む理由としている。

一方、「和装」の合計と「覚えていない」を比較すると、男子は両者に有意差がなかったのに
対し、女子は「和装」が有意に高かった ($p < 0.01$)。これは、男児の祝いの年齢(3歳と5歳)

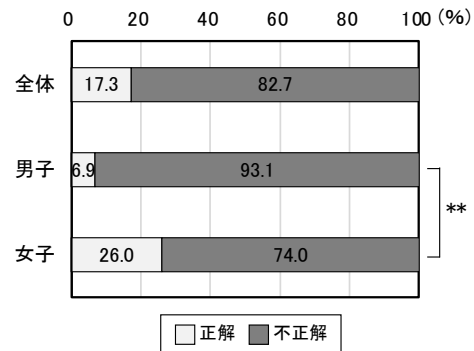


図4 七五三を行う日

七五三に行う日を調査した(男子144人、女子169人)。
男女間の有意差は、 χ^2 検定を用いた(* $p < 0.05$ 、
** $p < 0.01$)。

表10 七五三に参拝した際の服装(経験者)

項目	男子(複数回答)		項目	女子(複数回答)	
	人	%		人	%
和装 礼服	着物、袴	13 10.2	着物	127 75.1	
	着物、羽織、袴	48 37.5	着物、被布	34 20.1	
	水干	4 3.1			
洋装	スーツ	9 7.0	ワンピースドレス	46 27.2	
他	普段着	6 4.7	スーツ	1 0.6	
	覚えていない	51 39.8	普段着	1 0.6	
	無回答	5 3.9	覚えていない	23 13.6	
			無回答	1 0.6	

「七五三に参加したことがある」と回答した人を対象に、「七五三に参拝した際の服装」を回答してもらった
(男子128人、女子169人)。

表11 七五三で自分の子どもに着せたい服装

種類	主な対象年齢	種類	男児に着せたいもの(複数回答)				男女間の有意差	女児に着せたいもの(複数回答)				男女間の有意差
			男子(n=144)		女子(n=169)			男子(n=144)		女子(n=169)		
			人	%	人	%		人	%	人	%	
和装	5歳	着物、袴、羽織	126	87.5	107	63.3	**	-	-	-	-	
	5歳	着物、袴	45	31.3	27	16.0	**	-	-	-	-	
	3歳	水干	8	5.6	8	4.7		-	-	-	-	
	7歳	着物	-	-	-	-		107	74.3	133	78.7	
	3歳	着物、被布	-	-	-	-		33	22.9	51	30.2	
洋装	全般	ワンピースドレス	-	-	-	-		3	2.1	14	8.3	*
		スーツ	9	6.3	7	4.1		0	0	0	0	
平服		普段着	0	0	2	1.2		1	0.7	0	0	
		無回答	2	1.4	0	0		5	3.5	0	0	

「七五三に自分の子どもに着せたい服装」を検討した。男児・女児それぞれに分けて回答してもらった。「-」は選択肢を設けなかったことを示す。男女間の有意差は χ^2 検定により行った(男子144人、女子169人。* $p < 0.05$, ** $p < 0.01$)。

が女児(3歳と7歳)より低いため、記憶が曖昧であることや、男子は女子よりも服装(晴れ着)に対する関心が低いことなどが要因として考えられる。

3) 七五三の理解度(全員)

(a) 将来、七五三で自分の子どもに着せたい服装

上記において、男女とも自分自身は和装で参詣した人が多かった。そこで、将来、七五三で子どもに着せたい服装を、男児・女児に分けて検討した。対象は全員とした。

まず、男児についてみると、男女とも和装が高く、洋装は低かった(男子6.3%、女子4.1%)(表11)。和装の中では、男女とも「着物、羽織、袴」が高く(男子87.5%、女子63.3%)、男子は女子より20%以上も多かった($p < 0.01$)。七五三に参加した男子(128人)が着用した服装も、この組み合わせが多かった(37.5%、表10)、これを男子全体(144人)に換算すると、33.3%となる。一方、大半の男子が「着物、羽織、袴」を選択していたことから、自分が着ていなくても、将来、自分の子ども(男児)にはこれに着せたいと考えているといえる。

次に女児についてみると、男児同様、和装が洋装よりも高く、洋装は著しく低かった(男子2.1%、女子8.3%)(表11)。和装の中では、男女とも「着物」が多く(男子74.3%、女子78.7%)、男女間で有意差は見られなかった。女子は、自分が着た「着物」の種類(表10)と比べて、割合に相違がなかった。一方、「着物、被布」は、「女児に着せたい」割合(30.2%)と「自分が着た」経験(20.1%)を比べると、前者が有意に高かった($p < 0.05$)。

この要因として2つ考えられる。第一に、女児は祝う年齢が3歳と7歳であり、成長の程度(体格)も大きく異なることである。七五三自体がイベント化していることも相まって、年齢に合わせて別の服装を着せたいと思ったためと考えられる。第二に、近年はレンタルなどの借り衣装の家庭が増えていることから⁴⁶⁾、種類の異なる衣装(着物)を手軽かつ安価に借りられるようになっていることが考えられる。

七五三は子どもの祝いの儀式である。子どもの正式な衣装は、3歳の時には出産時の祝い着、5歳の男児は紋付羽織に仙台平の袴、7歳の女児は揚げをした本裁ちの着物にかかえ帯で、小物も独特のものがある²⁰⁾。また、本来、子どもが正統派でまとめた場合は、付き添いの母親も訪問着や色無地など格の高い和服にするのが正式とされる²⁰⁾。つまり、本来は祝われる対象で

表12 七五三に込められた願い(複数回答)

願い	回答人数(複数回答)			% (複数回答)			有意差
	全体 (n=313)	男子 (n=144)	女子 (n=169)	全体 (n=313)	男子 (n=144)	女子 (n=169)	
成長祈願	252	98	154	80.5	68.1	91.1	**
無病息災	137	61	76	43.8	42.4	45.0	
延命長寿	55	26	29	17.6	18.1	17.2	
子孫繁栄	15	7	8	4.8	4.9	4.7	
交通安全	12	4	8	3.8	2.8	4.7	
天下太平	4	4	0	1.3	2.8	0	
家内安全	6	1	5	1.9	0.7	3.0	
祖先崇拜	3	1	2	1.0	0.7	1.2	
五穀豊穰	4	1	3	1.3	0.7	1.8	
わからない	33	25	8	10.5	17.4	4.7	**
無回答	3	3	0	1.0	2.1	0	

「七五三に込められた願い」を上記選択肢から選択してもらった(男子144人、女子169人)。
太字を正解とした。男女間の有意差は χ^2 検定により求めた(* $p < 0.05$, ** $p < 0.01$)。

ある子どもだけでなく、祝う側(親など)を含めて家族全員が晴れ着(礼服)を着て参詣するのが正式なしきたりである。親の服装について、内田⁴⁵⁾は、子どもの和装は多様化している一方で、同伴家族の着装は和装が少なく、洋装が増えている(和装30%、洋装70%)としている。

参拝日に見られるように、七五三は家族の都合に合わせて実施されることが多いため、現代の家族のあり方や価値観、生活の仕方により変化していくものと思われる。

(b) 七五三に込められた願い

七五三に込められた願いを検討した。正解は「成長祈願、無病息災、延命長寿」である。

全体で最も多かったのは「成長祈願」(80.5%)であった(表12)。男女とも同様の傾向を示し、男子68.1%、女子91.1%であった(男女間で有意差あり、 $p < 0.01$)。次いで、「無病息災」「延命長寿」と続き、正解である3つが上位を占めた。男女とも「成長祈願」の回答が多かったことから、「七五三は子どもの成長を願う行事」という認識が高いといえる。「成長祈願」に比べて、「無病息災」「延命長寿」は低かった($p < 0.01$)。これは、七五三が行われるようになった背景に対する理解不足が要因と考えられる。

七五三の行事が行われるようになったのは、昔は子どもの死亡率が高く、3歳くらいになって初めて神社の氏子帳に登録されることが多かったこと、また、3歳、5歳、7歳は子どもの厄年とされており、その厄祓いも兼ねていたことが挙げられる²⁰⁾。七五三の縁起物である千歳飴はその名の通り、長寿を願うもので⁴²⁾、子どもの厄年を祓うことで、無事の成長と「長寿」を願って行われていた。一方、現代では、子どもの死亡率は低下し、長寿が当たり前になったため、「長寿」の意味が薄れてきたと考えられる。

(4) 総合考察

大学生において、帯祝いや初宮参りの認知度は低く、これら儀礼の謂れや祝い方などに対する理解が不足していることが明らかとなった。七五三は認知度・経験率ともに高かったが、参詣日や年齢、参詣時の服装など、知識が不十分な点がみられた。

宮里¹¹⁾は、現代の妊娠・出産・育児に関する慣習の変容について、①衰退・消滅したもの(産

後の禁忌, お七夜など分娩・産褥にからむ慣習), ②伝承がより広く行われるようになったもの(安産祈願, 宮参りや初節供など妊娠中の儀礼), ③形態や方法が変容されて伝わってきたもの(分娩後の実家への里帰り) などがあるとしている。①について, 1960年以降の施設内分娩への転換が衰退・消滅の大きな要因としている。②について, 若い母親世代は上記産育儀礼を行う者が有意に高く, 産育行動に関する限り伝統的風習への精神的依存は増加傾向にあるとしている。③は, 核家族化や住宅事情の悪化, 手伝い人の確保の難しさ, 医療技術に対する信奉等を反映していると推察している。特に1960年以降, 分娩の場が家庭分娩から施設内分娩へ急激に転換したことは産育慣習の変容に大きな影響を与え, これにより, 介助者, 援助者としての家族の役割が消滅し, 生児を地域の子どもとして迎えようとする慣習も次第に消失した¹¹⁾。一方で, 若い母親世代における産育儀礼に対する精神的依存の高まりについて, 産育の西欧化における文化的同一性の喪失に対する不安の表れと推測している¹¹⁾。

上記のように, 産育に関する儀礼や慣習は多様に変化してきた。伝承がより広く行われるようになった初宮参りや七五三は, 家族などと一緒に出かけて記念撮影等を行うことが一般化し, かつ, イベント化している。少産少子, 核家族化, 情報の氾濫といった社会情勢により, 産育儀礼はこれまでとは異なる形で変容し, 若い世代により新たな価値が付与され継承されていくと思われる。学校の役割は, 儀礼の知識を伝えるとともに, 家庭や地域社会を結びつけ, 伝統文化の理解・継承・発展・創造に繋げることにあると考えられる。

人生儀礼を行うことにより, 「自分一人で生きてきたのではなく, 多くの人に見守られてきた」と気付くきっかけになる⁴⁷⁾。人生儀礼を受ける側(祝福される側)と実施する側(祝福する側)の両方を経験することにより, 自分が社会を構成する成員であることを自覚し, また, 人生儀礼の意味や謂れをあわせて知ることにより, 文化継承の重要性を理解し, その担い手として貢献していくことができると考えられる。

変化の激しい社会において, 自分の生活のあり方を見直すとともに, 日本古来の人生儀礼の謂れや願いを理解する必要がある。人生を通過する上での儀礼を, 先人の知恵として受入れ, 生活や人生に少しずつでも生かしていくことが重要といえる。

5. まとめ

人生儀礼や年中行事は, 日本人の生活様式全てに関わる重要な文化である。しかし, 家族のあり方や社会の変化などにより, 家庭内における文化伝承機能は著しく低下・喪失している。加えて, 地域社会においても, 実施に関わる担い手の減少という課題を抱えている。

本研究では, 人生儀礼の中から産育儀礼に着目し, 大学生の現状と課題を検討した。その結果, 帯祝いや初宮参りは認知度が低かった。大学生は, 帯祝いを妊娠中の母親ではなく出生後の子どもに行うものと間違えて認識している人が多かった。初宮参りでは, 祝い方, 特に参詣日や参詣時の祝い着に対する理解が不十分であった。また, 七五三は, 自身の経験率が高い一方で, 実施年齢や参詣日を正確には知らないなど, 理解が十分とはいえなかった。

人生儀礼は生活や人生に深く関わるものであり, 家庭や地域のみならず, 学校などにおいて人生儀礼を学習する機会が必要であると考えられる。これにより, 人生儀礼をはじめとする我が国の伝統文化に対する興味を喚起させるとともに, 内容を理解し, 生活様式に合わせながら, 文化理解・継承・発展・創造へと繋げられるといえる。

謝辞

調査に快く協力いただきましたS大学教育学部の学生の皆様に感謝申し上げます。

参考文献

- 1) 永田美穂：面白くてためになる！日本のしきたり，PHP 研究所，pp. 3-4, pp. 38-39, pp. 124-125 (2012)
- 2) 高橋司：食で知ろう 季節の行事，長崎出版，p. 8, p. 90, p. 92, p. 116 (2008)
- 3) 日本風俗史学会 編：日本風俗史事典，弘文堂，p. 33, p. 488, p. 623 (1994)
- 4) 農林水産省：IV. 『伝統文化』が息づく地域社会の維持・継承，https://www.maff.go.jp/j/nousin/soutyo/binosato_gaidorain/pdf/068p089s4.pdf (2004) (2023. 11. 20 取得)
- 5) 藤本啓二：伝統行事と地域活性化の課題～国東市岩戸寺修正鬼会を素材にして～（第34回 地方自治研究全国集会「兵庫自治研」），
https://www.jichiro.gr.jp/jichiken_kako/report/rep_hyogo34/08/0835_jre/index.htm (2012. 10. 20 取得)
- 6) 文部科学省：小学校学習指導要領（平成29年告示）解説 総則編，東洋館出版社，p. 29 (2018)
- 7) 文部科学省：中学校学習指導要領（平成29年告示）解説 総則編，東山書房，pp. 29-30 (2018)
- 8) 文部科学省：高等学校学習指導要領（平成30年告示）解説 総則編，東洋館出版社，pp. 33-34 (2019)
- 9) 真部真里子，橋本慶子：年齢層による年中行事の認知と実施状況の相異，日本家政学会誌，53(5)，407-415 (2002)
- 10) 鷺見裕子：行事食に関する意識と実態，高田短期大学紀要 30，141-150 (2012)
- 11) 宮里和子：産育をめぐる慣習の伝承と変容に関する研究，民族衛生，57(5)，189-201 (1991)
- 12) 國分真佐代，大石恵美子：初産婦の産育に関わる慣習の実行程度，聖隷クリストファー大学紀要，27，33-41 (2004)
- 13) 村上陽子，高橋砂南，鳥居優理香，信國瑞希：若者世代における人生儀礼および年中行事の現状と課題—認知度と経験率—，静岡大学教育学部研究報告(教科教育学篇)，55 (印刷中)
- 14) 岡田啓助，岡中正行，沖永宜司，加藤健司 編：日本文化を知る 続，おうふう，p. 97, pp. 106-108 (2001)
- 15) ムカルジー・ヒヤ：愛知県都市部における産育にまつわる儀礼と信仰の現状，年報人類学研究，11，143-153 (2020)
- 16) 坂元一光：通過儀礼と表象テクノロジー：子供をめぐる民俗表象形式への写真の介入，大学院教育学研究紀要，2，191-201 (2000)
- 17) 飯島 吉晴：産育儀礼と贈答 『進物便覧』を中心に，天理大学考古学・民俗学研究室紀要，18，23-31 (2014)
- 18) 田中宣一，宮田登 編：年中行事事典改訂版，三省堂，p. 1, pp. 385-388 (2012)
- 19) 東朋美，森理恵：日常的着物着用者（女性）の着物着用実践のありかたと着物に対する意識，京都府立大学学術報告 生命環境学，60，1-17 (2008)
- 20) 主婦の友社 編：冠婚葬祭実用大事典，主婦の友社，pp. 178-179, pp. 182-185, pp. 188-189, pp. 190-191, p. 253 (2001)
- 21) 小笠原敬承斎：暦のたしなみ，ワニブックス，pp. 83-84, pp. 103-104 (2013)
- 22) 倉石あつ子，小松和彦，宮田登 編：人生儀礼事典，小学館，pp. 16-17, pp. 26-37, p. 47,

- pp. 62-65 (2000)
- 23) 大島建彦, 大森志郎, 後藤 淑, 斎藤正二, 村武精一, 吉田光邦 編: 日本を知る小事典 1 冠婚・葬祭, 教養文庫, pp. 151-152, p. 163, p. 167 (1979)
 - 24) ミニマル+ブロックバスター: イラストでよくわかる日本のしきたり, 彩図社, p. 63 (2013)
 - 25) 『現代用語の基礎知識』編集部 編著: 日本のたしなみ帖 しきたり, 自由国民社, pp. 94-95 (2015)
 - 26) 川口謙二, 池田孝, 池田政弘: 年中行事・儀礼事典, 東京美術選書, p. 235 (1978)
 - 27) 新谷尚紀 監修: 日本の「行事」と「食」のしきたり, 青春新書, pp. 96-97 (2004)
 - 28) 一般財団法人 京都宮廷文化研究所: 狩衣について, <https://kyoto-kyuteibunka.or.jp/column/561/> (2021. 12. 7 取得)
 - 29) 八條忠基: 素晴らしい装束の世界, 誠文堂新光社, p. 63 (2005)
 - 30) 一般財団法人 京都宮廷文化研究所: 束帯-闕腋袍, <https://kyoto-kyuteibunka.or.jp/column/390/> (2021. 11. 26 取得)
 - 31) 着物レンタルリエ: 着物の種類「水干 (すいかん)」, <https://kimono-rentalier.jp/column/kimono/suikantoha/> (2022.11.29 取得)
 - 32) 池上良太: 図解日本の装束, 新紀元社, pp. 68-69 (2008)
 - 33) 国立社会保障・人口問題研究所: 【1988年12月8日】「日本の人口・日本の家族」人口問題審議, <https://www.ipss.go.jp/publication/j/shiryou/no.13/data/shiryou/souron/42.pdf> (1988. 12. 8 取得)
 - 34) 福井新聞 ON LINE: 地方の長男「おもちゃは弟の十倍」期待と引き替えの優遇【ゆるパブ】(2), <https://www.fukuishimbun.co.jp/articles/-/767036> (2018. 12. 31 取得)
 - 35) 鎌田久子, 菅沼ひろ子, 坂倉啓夫, 宮里和子, 古川裕子: 日本人の子産み・子育て—いま・むかし—, 頸草書房, pp. 49-60 (1990)
 - 36) 長鶴美佐子: 褥婦の動静に関する民間的ケアの実態—非専門職による助言の分析から—, 母性栄養, 42(4), 528-537 (2001)
 - 37) (株) 日本家政学会: 家政学事典, 朝倉書店, pp. 470-471 (1990)
 - 38) 牧田茂: 日本人の一生, 講談社学術文庫, p. 73 (1990)
 - 39) 山上徹: 食文化とおもてなし, 学文社, p. 105, p. 118 (2012)
 - 40) 谷口貢, 板橋春夫 編著: 日本人の一生 一通過儀礼の民俗学, 八千代出版, p. 68 (2014)
 - 41) 火田博文: 日本のしきたりが楽しくなる本, 彩図社, p. 70 (2018)
 - 42) 広田千悦子: 暮らしを楽しむ七十二候, アース・スターエンターテイメント, p. 110 (2003)
 - 43) 筑後国一の宮 高良大社: 川渡祭 (かわたりさい) 別名へこかきまつり, <http://www.kourataisya.or.jp/matsuri/hekokaki> (2023. 11. 20 取得)
 - 44) 田口祐子: 七五三の全国的な広がりとスーパーの役割, 開智国際大学紀要, 18, 87-98 (2019)
 - 45) 内田直子: 七五三行事にみる家族衣風景の変遷: 1990~2002年について, 夙川学院短期大学研究紀要, 38, 51-58 (2009)
 - 46) 神野由紀: ファッション化する子供用品: 近代初期の消費イベントとしての七五三の事例を中心に, 日本デザイン学会, 54(1), 69-76 (2007)
 - 47) 永井とも子: 儀礼は人生を拓く, ヒーロー出版, p. 176 (2009)